

第14章 その他の活動

- 14. 1 大学広報誌
- 14. 2 中部大学キャンパスコンサート
- 14. 3 中部大学音楽祭
- 14. 4 中部大学幸友会および中部大学後援会
- 14. 5 チャレンジ・サイト

第14章 その他の活動

14.1 大学広報誌

14.1.1 ウプト（中部大学通信）

【現状の説明】

『ウプト（中部大学通信）』の前身である『中部工業大学通信』は大学開学から4年目にあたる1967年4月に創刊された。創刊の当初から編集委員会を置き、出来る限り多角的な見地からの編集を行ってきた。創刊の目的について、創刊号の編集後記は次のように記している。

「中部工業大学には、広く学生や父兄の方々に、学内の色々の計画や出来事などに関してお知らせする公的な印刷物は今までのところ何もなかった。新しい学部や学科の増設、建築の計画、人事異動、学内の行事など…中部工業大学の建学の精神や教育方針は、在学生はもちろんのこと、多くの方々にもできるだけ深く理解していただきたい大切なことである。……『中部工業大学通信』を年3回ないし4回定期的に発行し、その役に立てたいと思う」。

学園創立者の三浦幸平初代学長も一面の「創刊をよろこんで」の中で「…本学の関係者が一丸となって学園のために互いの心と心のふれあう機会をつくりたいと思う。その意味において『中部工業大学通信』が、広く教職員に、学生に、卒業生に、父兄その他多くの関係者に、十分な理解を得る一助ともなって、心温まる絆ともなりうるとするならば、発刊の意義まことに深いものがあると喜びにたえないのである」と述べている。

創刊号はタブロイド版で8頁。10段組み、1段15字。「桃園四季」「ランダムショット」などは今に続く企画である。「クラブ紹介」が第3号から始まり、今に続いている。

1984年4月の第69号より、中部大学への校名変更に伴い『中部大学通信』となった。

1992年3月には記念すべき第100号を発刊した。

100号発刊を記念して、中部工業大学の誕生から発展、そして、中部大学への歩み、大学の歴史の一つ一つを活字と写真で綴ってきた『中部大学通信』の創刊号から100号までの全ての号を収録して、翌1993年3月、『縮刷版』を発行した。

『中部工業大学通信』は当初、読者対象を教職員、学生、卒業生、父兄と幅広く設定し、大学における唯一の定期刊行物として機能させてきた。1993年4月、教職員を対象とした広報誌『ANTENNA』（後述）の発刊を機に、主たる対象を学生とすることにより、紙面の大幅刷新を図った。

第100号記念号をカラー化したのに端を発し、紙面のカラー化が少しずつ進み、開学30周年の記念行事を報じた第111号は多くのカラー写真が紙面を飾った。

カラー化が進む一方、学生にとってより親しみやすい紙面を検討した結果、2001年12月発行の第140号から『ウプト』と名称を改め、縦21センチ×横21センチの正方形で、24ページのオールカラーの冊子に変更した。「ウプト」とはエジプトのヒエログリフ（象形文字の一種）で「伝達する人」の意味。『ウプト』の編集委員は、現在、学内の教職員19人で構成されている。また、2002年5月号から登場した学生編集委員は、現在12人で活動。『ウプト』の中の「特集」は学生編集委員も参加して企画、取材、撮影、原稿制作をしている。

『ウプト（中部大学通信）』の発行部数は14,500部である。

【点検・評価】

『ウプト』は大学の行事を受け、それを速やかに報道できるよう年4回（5月末、7月末、11月末、2月末）発行している。

正確な報道という面で、校正の問題がある。校正は編集委員と広報部員が行っており、特に担当の制作課では、2008年頃より課員の校正を個別で行う方式を改め、課全体で校正ミーティングを行っており、以降、校正漏れがほとんどなくなった。

現在は学生向け媒体と規定し、何よりもリーダビリティの向上に努力している。特に最近の学生の「文字離れ」を認識しつつも、「文字を読む」行動を起こさせるような「読みたくなる紙面づくり」を学生編集委員らの意見を反映させながら制作している。

また、配布方法としては、学生の父母宛への郵送に加えて、学生の集まり易い学内22ヵ所に専用のスタンドを設置しているほか、図書館など学生が利用する施設等の資料コーナー等にも配置している。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

①学生のための情報提供強化

本誌は学生のための媒体であることを視野に入れ、学生の意見を収集することはもとより、学生の持っている情報を的確にキャッチする努力を引き続き拡大していくようにする。

②リーダビリティの向上について

『ウプト』に変更してから読みやすさの向上がより図られているが、より読み手の立場に立った紙面づくりを意識し、つねに見直しを続ける必要がある。

③校正ミスの根絶

これはより多くの人が注意深く校正を行うこと以外に方法は見当たらない。現状では執筆者・情報提供者、編集委員、広報部員が当たっているが、最終的には制作課メンバーの責任校正体制による以外に方法は見当たらない。

④配布方法

中部大学後援会の協力も得て、学部・大学院の学生の保護者宛てに発送している。あわせて学内のスタンドを活用することで、学生や教職員がいち早く手にすることも出来る体制を取っている。スタンドから学生が手にする部数は毎号500～700部程度である。この方法も継続していきたい。

14. 1. 2 ANTENNA

【現状の説明】

『ANTENNA』は大学の3学部体制も軌道に乗り、開学30周年を翌年に控えた1993年4月、大学教職員のための広報誌として創刊した。広報〈紙〉ではなく広報〈誌〉としたのは、教職員のためのオピニオン誌を目指し、将来的な発展を見越し、頁数の拡大にも対応できるようにしたためである。

発刊は隔月、A4判横組み、表紙とも16頁を基本としつつ情報量の多い時には増頁が簡単にできるようにした。オピニオン誌を目指すところからも、各頁を「論壇」「CLOSE UP」「NEWS SPOT」「My Note」など、あらかじめ機能を明確にした紙面づくりを目指した。

『ANTENNA』の発行のねらいについて、当時の山田和夫学長が創刊号で次のように述べている。「…これまでも学園・大学で発刊されてきた『三浦学園報』が学園全体の教職員を、『中部大学通信』が中部大学の学生諸君を、それぞれ対象としているのに対して、『ANTENNA』は中部大学の教職員を

対象としたもので、大学内のコミュニケーションをより一層良くしていこうというねらいをもっている。

大学という組織の性格上からか、同じキャンパス内で働く者同士でありながら、これまでお互いのコミュニケーション・情報の交換が、とかく十分でなかった面がありがちであったことは否めない。『ANTENNA』は、そういう反省のうえに立って、学内の情報交換を活性化し、お互いの共通理解の場を広げていくための手段の一つになってほしいと考えている。…アンテナには受信用のものと発信用のものがある。『ANTENNA』とは、情報をキャッチし、かつ発信していくという意味を込めてのネーミングであるとするれば、それはまさにシンボリックで、これからの本学における大学改革においても、その重要な一翼を担ってくれるものと大いに期待をします。…」

こうした方針に基づき、まず編集委員会を組織し、委員会の総意にもとづき編集を進めてきた。

『ANTENNA』の位置づけを大学教職員のためのオピニオン誌としたことで、多くの誌面、コーナーにそれぞれ編集意図を明確にしている。

「論壇」は大学の問題、大学改革からはじまり、教育、研究などで筆者を指定し、論を展開する頁としている。

「CLOSE UP」は組織、活動などの紹介から、折々の話題を記名記事として掲載している。

「NEWS SPOT」は折々のニュース的なもので、教職員にぜひ知ってもらいたいものなどを紹介している。

「私の1〇」は1998年4月発行のNo.28から始まったコーナーで、オピニオン誌の中にあってのアットホームなオアシス的ページとして位置づけ、個人的な趣味、食べ物情報から行きつけの店などを紹介してもらう目的で企画したものである。

「My Note」はオピニオン誌にふさわしくさまざまな意見を述べてもらうコーナーとして企画した。

「Accademia」は2005年4月発行のNo.67から始まり、学内外で本学主催で行われた講演会等の要約を中心に展開している。

「コラボcollaboration」は2007年2月発行のNo.78からスタート。教職員と学生が協力して取り組むさまざまな活動を紹介している。

「私の授業づくり」は2008年4月発行のNo.85からスタート。これは、本学がFD活動の重点目標として2008年度から取り組んでいる『魅力ある授業づくり』の活動を学内の教職員が共有することを目的としている。

「新刊紹介」や「寄稿」なども折に触れて掲載している。

この他に、2003年6月発行のNo.56から恵那キャンパスの豊かな自然を紹介する「恵那花だより」を、2005年10月発行のNo.70から続編として「恵那昆虫記」を翌年12月発行のNo.77まで掲載した。

なお、「CYBER SPACE」「広報」は2005年に廃止した。

「表紙」は当誌の顔として、本文への導入を図るための重要な位置にあることをはっきりさせ、当該期間でのイベント・ニュースなどの中から表紙にふさわしいものを選んで使用している。

2010年10月に発行したNo.100号は、100号という節目を大西良三学園長、飯吉厚夫総長、山下興亜学長、中島 泉副学長、後藤俊夫副学長、小野桂之介副学長の座談会を企画、三浦昌夫学監（ANTENNA編集委員長）の司会で進められた。また、全100号を飾った表紙写真を見開きで紹介した。

100号記念座談会で出た「他学部・他学科では何が起きているのか、意外と知らないのではないか」という意見を受け、第101号より「PLAZA」というコーナーを設け、各3学科・1研究所の主任教授・研究所長が各々の現況を紹介した。

『ANTENNA』の発行部数は1,200部、うち約300部は大学、高校、報道・行政機関などに送付して

いる。

【点検・評価】

オピニオン誌として主として教員に執筆を依頼しているが、多忙という理由から断られることも多々ある。隔月発行ということもあり、原稿依頼から締め切りまでの期間が1ヵ月程度の設定であるので、もう少し余裕を持った依頼ができるようにする必要があろう。

後半に設定している「私の1〇」「My Note」ももっと身近にある情報も、もっと軽く紹介してもらえば誌面そのものがさらに楽しくなり、その中から教職員同士の交流も進んでいくのではなかろうか。

2001年度には応用生物学部、2006年度には生命健康科学部、2008年度には現代教育学部が設置され、現在では7学部29学科の総合大学となった。専門分野が異なる者たちが意見を戦わせ、そこから新しい大学を創っていくための媒体としての機能がいちだんと重要になってくる。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

一石を投じても波紋として広がらない。誌面を飾った意見や情報に対してのレスポンスがほとんどない。これはあまり読まれていないことへの何よりの証明であるかもしれない。

編集委員会、編集部からの情報発信を単に誌面のみにとどめるのではなく、具体的にフェイス・トゥ・フェイスでの情報発信と確認を意識して繰り返していくことが必要だと考えられる。情報を読みやすく表現することはもとより、つい読みたくなるようにするために、編集の努力が必要なところである。

14. 2 中部大学キャンパスコンサート

【現状の説明】

学園創立50周年を記念し、1988年12月に第1回として開催されたキャンパスコンサートは「教育の場で音楽に親しみながら学ぶ」という特色のあるコンサートとして定着し、24年間（69回）続いている。国内外で活躍する音楽家を招聘し、三浦幸平メモリアルホールを毎回ほぼ満席にしている。演奏の前にはコンサートレクチャーが実施され、公開講座としての演奏会でもある。

【点検・評価】

大学が提供する地域の芸術・文化活動としてのキャンパスコンサートは、春日井市とその周辺地域へ貢献する事業として評価され、地域住民に親しまれて回数を重ねている。また、中部大学ボランティア・NPOセンターの協力により、チャリティコンサートとして、スマトラ沖地震への支援以来、日本介助犬協会、東日本大震災などへの支援を続けている。中部大学ボランティア・NPOセンターの学生参加によって、より社会貢献度の高い演奏会となっている。なお、今まで国の内外から招聘した演奏家への報酬謝金経費や名古屋会場での開催による会場使用料について検討され、今後メモリアルホールのみで開催とする予定である。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

現代教育学部設置により、常勤・非常勤講師の優秀な演奏者への出演依頼を予定している。キャンパスコンサートに本学の教員自ら演奏者として出演し、学生への入場もより促すことが出来る。入場者のほとんどは地域住民であるが、今後は学生への入場PRにも努める。

14. 3 中部大学音楽祭

【現状の説明】

1976年より学園が設置する各校の学生・生徒による合同演奏会として開催されて以来、「三浦学園音楽祭」は2003年に29回を数え、多彩なジャンルの音楽団体によるユニークな学園行事として定着した。2004年度学園の名称が学校法人三浦学園から学校法人中部大学へ変更されるのに伴い、設置校の個性を活かし、各校がそれぞれ独自に開催することとなった。大学の音楽クラブの代表は「音楽祭学生実行委員会」を結成「中部大学音楽祭」として、学生の音楽クラブによる演奏とプロの演奏家を招く演奏会となった。第1・2・3回と第5回では、プロの指揮者・ソリストに加え、「春日井市民第九合唱団」と「春日井市交響楽団」の参加により、学生とともに「第九」が演奏された。学生、職員、保護者、幸友会会員、地域の市民の協力・支援のもと、チャリティーコンサートとして、2011年には8回を迎えている。会場は愛知県芸術劇場コンサートホール、しらかわホール、名古屋市公会堂、アートピアホールなどで開催している。

【点検・評価】

音楽クラブ5団体（マンドリン、シンフォニック、軽音楽、混声合唱、管弦楽）の個性を活かし、学生による音楽祭実行委員会の運営で、各クラブの枠を超えた協力体制の下、芸術性と教育面のバランスのとれた演奏会となっている。また、中部大学ボランティア・NPOセンターの協力により、NHK歳末たすけあい・NHK海外たすけあい、中日新聞社会事業団、東日本大震災などへの支援を続けており、チャリティーコンサートとしても、評価できる。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

名古屋市内で開催してきた音楽祭について、開催会場の見直しが検討され、今後春日井市民会館での開催を予定している。地域社会との連携の中で、地域に根ざす大学として、相互協力関係を構築してきた春日井市と中部大学にとって、地元での開催に期待すべき点は多い。春日井市唯一の大学として、音楽活動を通じて貢献する行事となるよう、更なるレベル向上を目指した音楽祭とする。

14. 4 中部大学幸友会および中部大学後援会

【現状の説明】

<中部大学幸友会>創立者の名前の一文字から命名された「幸友会」は、学校法人三浦学園が創立50周年を迎えたのを記念して、1989年に設立された。学園と地元の産業界、経済界、行政、地域社会との交流を盛んに行うことによって双方の発展を期するため、初代会長の川口将一氏より引き継がれて、会長は歴代地元春日井市商工会議所会頭が就任し、発足当時の法人会員437社・個人会員143名から、現在、法人会員738社・個人会員452名の組織へと拡充してきた。学園との様々な連携により、講演会、学内企業説明会、企業ガイド・幸友会就職ナビの作成、産学協同事業の推進、キャンパスコンサート協力など、常に時代の要請に即した事業を展開してきた。

<中部大学後援会>1967年に設立されて以来、大学の教育・研究および施設・設備の拡充に協力し、学生の課外活動援助・就職活動や資格取得講座補助などの支援を継続している後援会では大学と保護者との連絡を密にすることで、協力体制を築いている。中でも「父母との集い」の開催は、1971年から「父兄懇談会」としてスタートして以来、学長を始め多数の教職員の協力により父母との絆を結び続け

てきた。毎年、地方会場各都市5～6会場と大会場で開催する「父母との集い」では、保護者が本学の現況を知り、学生個人の状況については指導教授と面談するなど、きめ細かな支援体制で実施している。

【点検・評価】

＜中部大学幸友会＞先の見えない経済動向により、採用企業側と学生の就職活動双方向への支援に幸友会の果たす役割は大きい。キャリアセンター主催の学内企業説明会への幸友会の会員企業の参加協力と企業ガイド・就職ナビの活用促進で幸友会企業への就職率は、全体の18%となっている。また、研究支援センターのシーズ紹介「中部大学フェア」では、幸友会企業の参加により産官学連携の推進に協力している。

＜中部大学後援会＞多様化する学生の就職活動への支援として、キャリアセンターによる資格取得講座への受講料補助や企業説明会開催補助を行っている。「父母との集い」では多数の父母から学生の就職相談希望があり、キャリアセンター職員による対応も好評である。また会報「信頼」は、保護者が学生の生活を身近に感じとれるような情報発信ツールとして、保護者と学生のコミュニケーションに役立ち、大学と保護者そして学生とが信頼関係を保つという目的を果たしている。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

幸友会・後援会ともに、大学と会員双方にとって、満足度の高い有益な関係が築けているかを常に見直していく必要がある。友好的協力関係が築かれた幸友会企業は、学生の優良な採用企業となり、保護者の満足度を高める要因ともなる。中部大学にとって幸友会、後援会ともに重要な支援組織として、今後も様々な連携を進めていく必要がある。

14.5 チャレンジ・サイト

【現状の説明】

「チャレンジ・サイト」は、2006年度より、学生に「ものづくり」への意欲を持たせる、刺激を与えることを目的として、工学部及び応用生物学部の学生を中心に5つのプロジェクトで活動を開始した。現在では「ものづくり」から発展し、新しい物事にチャレンジする意欲を持った学生に対して、様々な形で活動の機会や刺激を与え、支援し、育てていくことを目的として、16のプロジェクトがあり、のべ550名以上の学生が全学部より参加し、活動を行っている。活動は学生が中心となるが、プロジェクトを継続して進めていくために、教員が顧問の立場でサポートを行っている。

また、年度末には各プロジェクトの学生代表による報告会を開催し、プロジェクト活動について報告を行っている。さらに各プロジェクトの年間活動報告書をホームページ上に公開している。

チャレンジ・サイトの活動に関する方針等の決定は運営委員会を組織して、募集要項の決定、申請プロジェクトの審査等について協議の上、運営している。

【点検・評価】

「チャレンジ・サイト」の特徴は、学生が主体的に活動に参加することにより、授業、クラブ活動の枠にとらわれない活動を自ら企画し、実行することにより成果を上げ、成長することにある。この支援体制のもと活動面でよい結果が得られるようにするために、今後さらに活動しやすい環境を整えるなど

のサポートを行っていく必要がある。

しかし、「チャレンジ・サイト」は採用プロジェクト数が増え、学部の垣根を越えて様々なプロジェクトが活動しているため、全てのプロジェクトの活動状況を把握することが年々困難になってきている。また、プロジェクトにより活動内容等に差があり、そのため全プロジェクトが一定以上の活動水準に達するようにプロジェクトへのバックアップ体制の充実が必要である。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

- ① リーダーの育成を目的として、各プロジェクトのリーダーミーティングを実施する。
- ② 指導・助言の立場にある各プロジェクト教員に対する相互理解・協力体制確立のための連絡会を実施する。
- ③ プロジェクト参加学生が常時集まれる集会場所等の施設整備・改善に取り組む。
- ④ 各プロジェクトの活動の把握、サポートに努めるため、現状の担当部署だけでは対応に限界があるため、他部署との連携を行う。